協同のひろば

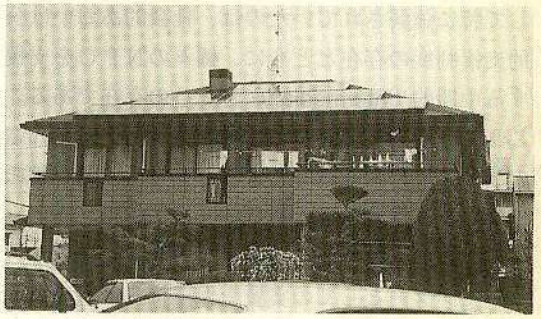
「我家に小さな発電所」を

都筑　建（東京都／ワーカーズ・コープ エコテック代表）

今から6・7年前の暑い夏に、三重県の南端の古和浦という小さな漁港を訪ねたことがある。昼下りに港町特有の狭い路地を歩いて気付くのは各戸の玄関先に貼られている赤いステッカーだった。それには「芦浜原発絶対反対」と「原発で明るいまちを」が書かれ、入り乱れていた。東京からこの漁港までたどり着くには何十時間もかかる過疎の村での情景だった。よく聞くと、芦浜はこの古和浦から船で30分程かかる無人の浜であるが漁業権がこの漁協にあり、原発設置で村が誘致派と阻止派に分かれている。当初は圧倒的に阻止派が多数であったが、ハマチ養殖の失敗で借金を抱える漁民の間に多額の実弾(金)がバラ撒かれて、徐々に阻止派は減少し、拮抗するようになった。一つの家族の中でも親兄弟が対立し、家庭が崩壊しているところも少なくないという。昔から肩を寄せ合うようにして暮らしてきた村や家庭が、そして地域全体が、ズタズタにされいがみ合う状態にされた。

大都会で消費される莫大なエネルギー源を確保する為にその大都市から限りなく遠い地に電力会社が中心に原発建設が推められ、ちょうど、母体行の銀行にあやつられた住専やその手先となった地上げ屋達と構造はまったく同じであった。酷暑の潮風の流れる閑散とした路地で思わずゾクッと背筋に冷たいものを感じたことが鮮明に憶い出される。

昨夏も猛暑だった。私は新潟県の巻町の屋根の上にいた。あまりの夏の暑さに耐えられず、太陽光発電システムを取付ける作業を陽が陰るまで待たねばならなかった。そうしてやっと屋根に上ると宣伝カーのスピーカーの声が聞こえて来る。そして眼下の家の玄関先には空色の制服の電力会社の2人連れが勧誘していた。もちろん「原発を誘致して、炭酸ガスの出ない地球とやさしい町をつくろう」といって。しかし芦浜の時の閉塞状況とは違って、緑の田圃に囲まれていたこともあって妙に落ち着いていた。電力会社の人達も暑さのせいだけでなく元気がない。



内田基大邸（愛知高齢者協同組合理事長）の太陽光発電システム完成

80年代末と90年代半ばの現在とでは日本人の意識には大きな差がある。段落といってもいいような変化である。阪神・淡路大震災での神戸の都市の崩壊で決定的となった、これまでの文明の進化への疑問が環境問題・エネルギー問題に如実に出てきている。しかし底流ではすでに変化が起こっていた。ちょうどこの「段差」の時期にあたる91年9月に電通が「環境問題に関する生活者意識・実態調査」を報告している。その中では、「環境問題」は他の社会問題（土地や高齢化問題など）で最上位の社会テーマとなっており、これまでの「産業公害」から地球規模や日常生活に起因する問題へと広がっている。ほとんどの生活者が「環境問題」を身近な問題と意識し、深刻化するとし

ている。

生活水準と環境保全の両立を模索するものの、必要ならば10年前位まで生活レベルを後退しても良いという人が８割を占めている。そして環境情報を欲しながらも環境広告などには表面的と冷めた見方もしている。さらに、水俣病問題、森永、カネミ油症問題やスモン病問題などの苦闘の時期と、あれ程頑迷で厚顔だった厚生省や、薬品メーカーを土下座させた現代とは、やはり大きな段差がある。突発的に表面化した個々の事象はそれぞれ無縁でなく、底部で醸されて出てきたもの。文明の変化は、こんな風に見える。そしてエネルギー問題もそれらにからまりながら「段差」を示している。

まだ極端な例かもしれないがエコテックが昨年実際に施工した神戸市に近い三田市の小宮純子さんは次の様な報告を行っている。

『10月13日《95年》我家の太陽光発電所が動き出しました。約１ヶ月たって、好天続きであったこともあり発電量は280ｋｗ。関西電力に売った電力は253ｋｗ。買った電力56ｋｗ（雨の日や夜など発電していない時間に使った電力）発電中に使用した電力が27ｋｗ。合せて全使用量が83ｋｗ《貴方の家の１ヶ月の消費電力は何ｋｗか知っていますか？それとこの数字を比較して下さい。》と我家は（家族３人）必要最小限の電力消費（冷蔵庫は１ドア）なので、同じように消費の少ない家なら３家族分くらいの電力を発電していることになります。

数万年という気の遠くなるような長い間、毒物の管理をしなければいけない原発にたよる生活はしたくありません。自分が子どもだった頃の生活に少しだけ戻してみることで原発なしで暮らせるなら私はそうしたいと思います。太陽光発電などの補助がもっと拡大され、学校の大きな屋根にも、どんどん太陽光パネルをとりつけるなどの取り組みがされればいいなあと思います。発電設備に二百数十万円程の自己資金が要りますが、我家に車はなく（リヤカーと自転車があります）肉も魚もあまり食べない。（牛肉は10人分の穀物を食いつぶして一人の胃袋におさまるそうです）玄米食中心の食事。《太陽光システム取付けの工事の10時や３時の休みの時に出していただいた手作りの玄米焼おにぎりなどなんと美味しかったことか》子どもは塾に行かず《２人の中・高生の息子は工事を手伝ってくれた》自由時間はたっぷりあり、ゴミを出すのも月１回程度……。《少し垣間見た生活振りは無理なく。この文章の通り》そんな生活をしていた時「太陽光発電」を知り、エコテックという自然エネルギー事業協同組合のメンバーに出会い、半額負担のモニター《通産省の個人住宅用太陽光発電モニター事業》に当選し実現しました。』（《　》は筆者注）

元々原発の安全性についてはスリーマイル島原発事故やチェルノブイリ原発事故（今年の４月26日で10周年）を契機に懐疑派が過半数を越えていたが、芦浜でみられた通り反原発＝異端の現実であったが、昨年の高速増殖原型炉「もんじゅ」の事故とその情報隠しで、少数派になったのは原発推進派である。平和利用の言い逃れも許されない状況となった。巻町では今年の８月に原発についての住民投票が日本で初めて行なわれる。原発を新たな土地に作るのは不可能に近くなった。

あの原子力委員会でさえ、反原発の立場の人も参加する「円卓会議」を新設すると発表した。（３／15）

ついこの間までは秘密主義に徹していた姿勢を知る者には隔世の感がある。

もう巨大な火力や原子力発電所やあるいは自然の生態系を破壊するダムによる大型水力発電などの大規模集中型のエネルギーシステムではこれから先はやって行けないことは明確である。

一人一人が、自分の家の屋根や村や地域の中から少しずつ分散型で自立し、再生万能なエネルギーを創り出す作業に入る時が来ている。目の前の採算性にとらわれて先へ先へと延ばしてゆくことが将来ふりかかってくる環境破壊の代償の支払の拡大とあるいは支払不能に陥ることとなるのは明白になっている。なぜ莫大なエネルギーを浪費しながら大都市の中で長距離通勤を続けるのか。そ

の為に静かな自然豊かな郷土の社会を乱し、気の遠くなるような長い送電線を山々の緑を切り倒して都会につなげなければならないのかと。

ソフトエネルギーの実現が小規模分散型地域社会を作るカギを握っているといっても過言ではない。

日本労働者協同組合連合会の前理事長の内田基大さんも名古屋の自宅に５ｋｗの太陽光発電システムを設置された。（20頁写真）

補助モニターに当選しなかったにもかかわらず「孫の為にも、自分でできることを残してやりたい」といわれながら。補助事業が今年も４月末（予定）から始まる。しかしこれはソフトエネルギーの普及のきっかけであり、補助ナシでも「我家にも小さな発電所」がつけられるのはもう間近である。

〔太陽光発電システムをはじめとするソフトエネルギー全般（風力・小型水力・バイオガス・太陽熱温水器など）の問い合わせはワーカーズコープ・エコテックへ〕

エコテックは移転しました。

〒211 川崎市中原区上丸子天神町386
金子ビル１Ｆ
TEL.044－722－9543　FAX.044－722－9544